

# 教育哲学研究

第 119 号

2019

## 研究討議

「資質・能力」を哲学する—汎用的〇〇は未来を拓く?—

コンピテンシー・ベ이스の教育が抱える可能性と危うさ	奈須 正裕 ( 1)
「資質・能力」論の構図—資本主義という基底—	青柳 宏幸 ( 7)
虚空に漂う教育—人間不在の「資質・能力」論の陥穽—	松下 良平 ( 13)
研究討議に関する総括的報告	山内紀幸 / 松浦良充 ( 19)

## 課題研究

「教えること」を再考する—教育（哲学）の再構築を目指して—

教えられることの可能性に向けた教え—学びの時代における世界—中心的教育—	ガート・ピースタ ( 26)
自由・権威・パトスの経験—G・ピースタ「教えることの再発見」への応答の試み—	小野 文生 ( 37)
無知な市民の可能性に向けた教えることの再発見—日本の文脈から—	小玉 重夫 ( 45)
課題研究に関する総括的報告	加藤守通 / 上野正道 ( 50)

## 論文

『否定弁証法』におけるアドルノのカント批判—「衝動」を契機とする「自律」概念に注目して—	安道健太郎 ( 57)
H・アレントの思想形成過程における教育への問い—世界疎外論に着目して—	田中 智輝 ( 75)

## エッセイ

近代日本における仏教の教化性と教育性—特に真宗について—	川村 覚昭 ( 94)
------------------------------	-------------

## 教育哲学を考える

平成の教育・・・	梶 紀夫 (110)
----------	------------

## 研究状況報告

子どもとの哲学対話—Philosophy for / with Children—	田中智志 / 山内紀幸 / 鈴木崇 ( 112)
ディシプリンとしての教育学を考える—小笠原道雄 / 森田尚人 / 北詰裕子 / 白銀夏樹 / 丸山恭司 ( 119)	
「共生」と「継承」の間、あるいは「継承」と「共生」の間—金正美 / 花崎翠平 / 岡部美香 / 高橋舞 ( 127)	
言葉とアートをつなぐ教育思想—「詩的な言葉」「想像力」「記憶」を手がかりとして—	渡辺哲男 / 柴山英樹 / 山名淳 ( 134)
保育が新しい教育哲学をつくる?!—田口賢太郎 / 富田純喜 / 米津美香 / 河野桃子 ( 140)	
AI技術文明時代に求められる教養を探る—法・倫理・教育にとっての技術革新と人間社会—	松浦良充 / 福田雅樹 / 鈴木晶子 ( 146)
教育と政治の交わりについて再考する—東アジアの若手教育哲学者とともに考える—	生澤繁樹 / 高宮正貴 / 颯景徳 / 梁卓恒 / 林仁傑 ( 153)

## 書評

ガート・ピースタ著（上野正道監訳）『教えることの再発見』	宮寺 晃夫 (160)
相馬伸一著『コメニウスの旅—〈生ける印刷術〉の四世紀—』	眞壁 宏幹 (167)

## 図書紹介

衛藤吉則著『西晋一郎の思想—広島から「平和・和解」を問う—』	森田 尚人 (174)
小川博久・岩田蓮子・本庄富美子著『授業実践の限界を超えて—ある教師の表現者としての教育実践—』	辻 敦子 (177)
ジョン・デューイ著、加賀裕郎訳、田中智志解題『デューイ著作集4 哲学4—確実性の探求—知識と行為の関係についての研究—』	古屋 恵太 (180)
菱刈晃夫著『メラニヒトンの人間学と教育思想—研究と翻訳—』	深谷 潤 (183)

## 学会報告・第61回大会報告

## 英文摘要

教育哲学会

# STUDIES IN THE PHILOSOPHY OF EDUCATION

No. 119

2019

教育哲学研究

第 119 号

二〇一九年

教育哲学会

## Symposium

**Competence: A Critical Approach to Contemporary Education**

Potential and Pitfalls of Competency-Based Education	Masahiro Nasu ( 1)
Competence and Capitalism	Hiroyuki Aoyagi ( 7)
Education without Consideration of Human Inquiry: Flaws in Arguments on Competencies	Ryohei Matsushita ( 13)
Summary Report on the Symposium	Noriyuki Yamauchi, Yoshimitsu Matsuura ( 19)

## Thematic Research

**Rethinking Teaching: Toward the Reconstruction of (Philosophy of) Education**

Teaching for the Possibility of Being Taught: World-Centred Education in an Age of Learning	Gert Biesta ( 26)
Freedom, Authority, and the Experience of Pathos: A Response to Gert Biesta's "The Rediscovery of Teaching"	Fumio Ono ( 37)
Rediscovering the Teaching of Ignorant Citizens: The Context of Japan	Shigeo Kodama ( 45)
Summary Report on the Thematic Research	Morimichi Kato, Masamichi Ueno ( 50)

## Articles

Adorno's Criticism of Kant in Negative Dialectics: On Autonomy Triggered by "Impulses"	Kentaro Ando ( 57)
Education as a Process of Thought-Formation: On the Theory of World Alienation in the Work of Hannah Arendt	Tomoki Tanaka ( 75)

## Essay

The Education Quality and Educationalization of Buddhism in Modern Japan: A Focus on Shin-Buddhism	Kakusho Kawamura ( 94)
--	------------------------

## Some Thoughts on Philosophy of Education

Education of IHEISEI	Norio Sumeragi (110)
----------------------	----------------------

## Research Reports

Philosophy for / with Children	Satoshi Tanaka, Noriyuki Yamauchi, Takashi Suzuki (112)
Examining Educational Research as a Discipline—Michio Ogasawara, Hisato Morita, Yuko Kitazume, Natsuki Shirokane, Yasushi Maruyama	(119)
The Possibility of the Inheritance of Other's Memories through Co-existence with Others	Chongmi Kim, Kohei Hanazaki, Milka Okabe, Mai Takahashi (127)
How do We Connect Language with Art in Education?	Tetsuo Watanabe, Hideki Shibayama, Jun Yamana (134)
Rethinking Philosophy of Education from the Perspective of Early Childhood Care and Education	Kentaro Taguchi, Tsunaki Tomita, Milka Yonezu, Momoko Kono (140)
Bildung/Liberal Arts in the Era of AI-Techno-Civilization: Technological Innovation and Human Society from the Perspectives of Law, Ethics and Education	Yoshimitsu Matsuura, Masaki Fukuda, Shoko Suzuki (146)
Reconsidering the Intersection of Politics and Education: East Asian Perspectives	Shigeki Izawa, Masaki Takamiya, Hektor K. T. Yan, Cheuk-Hang Leung, Ren-Jie Vincent Lin (153)

## Book Reviews

Gert Biesta(trans. Masamichi Ueno, et. al.), <i>The Rediscovery of Teaching</i>	Akio Miyadera (160)
Shinichi Sohma, <i>The Journey of Comenius: Four Centuries through 'Typographem vivum'</i>	Hiromoto Makabe (167)
Yoshinori Eto, <i>The Thought of Shinichiro Nishi: Thinking of 'Peace and Reconciliation' from Hiroshima</i>	Hisato Morita (174)

## Book Recommendations

Hirohisa Ogawa, Junko Iwata, Fumiko Honsho, <i>Beyond the Limits of Conventional Educational Practice: A Case Study</i>	Atsuko Tsuji (177)
John Dewey(trans. Hiroo Kaga), <i>The Quest for Certainty: A Study of the Relation of Knowledge and Action</i>	Keita Furuya (180)
Teruo Hishikari, <i>Melanchthon's Anthropology and Educational Thought</i>	Jun Fukaya (183)

## Society Update and Reports of the 61st Annual Meeting

## Abstracts

The Philosophy of Education Society of Japan

衛藤吉則著

『西晋一郎の思想——広島から「平和・和解」を問う——』

森田尚人

西晋一郎ほど、敗戦による文化的断絶の影響を蒙った思想家は少ないだろう。西は、広島高等師範学校（及び文理科大学）の教授を一九〇二年の創設時から定年退職まで勤め、三年後の一九四三年に没した。広島を拠点に、独自の視点から東西の哲学の総合をめざした、戦前期の日本で最も影響力のある哲学者のひとりだった。しかし、西田幾多郎とは対照的に、戦後になると西はほとんど忘れられた思想家となり、隈元忠敬など弟子筋にあたる研究者によって語り継がれてきたにすぎない。

著者はシユタイナー研究で知られるが、広島大学の倫理学教室の教授職にある。西に直接つらなる講座の担当者によって、本格的な西研究が承継されたことを喜びたい。西哲学の復権をめざす本書には、著者のオリジナルな論稿のほかに、

ローグとして（封印）された思想家のひとりである。著者は、西の思想を抛り所にして、「平和実現のための実践的で実効的な理論モデルを提示」しようとする。戦後日本において「平和」の問題は進歩的陣営の政治的専有物だったことを考慮すれば、著者の試みはパラドキシカルで、大胆なものにみえてくる。西のナシヨナリズム論の前提となっている「民族国家」は、他人を欲望の対象と見ず、目的そのものと見る「人格的関係」を統一する具体的体系として捉えられる。そして、諸個人の体現する特殊な国民道徳に貫かれる「透徹せる普遍的道徳こそが、多文化社会として構成される人類同胞の間に通じる普遍的道徳となりうるものとされた」（七三頁）。そうした西の国家観は、現実生活を顧慮しない抽象道徳を他国に押しつけるような「闘争的排他的ナシヨナリズム論」をきびしく排斥することになる。それは当時の思想家の多くが、海外列強の非合理的な抑圧に直面して闘争的排他主義に舵を切ったのとは、本質的に異なる思想的態度に帰結したはずだ、と著者は言う。

そうした思想的・政治的態度を可能にしたのが、西思想の核心としての「特殊即普遍のパラダイム」であった。それは、ヘーゲルのいう「具体的普遍」の概念をどのように捉えるかという問題と言える。戦前・戦後を通して、またマルクス

ていねいな書誌や蔵書目録が加えられている。西は道徳や教育に深い関心を寄せた哲学者であったが、西の教育に対する関心のもち方には、T・H・グリーンやF・アドラーの訳業にみられるように、デュレイと同じ思想圏にあったことがうかがえる。他方で、京都学派関連の文献は思いの外少なく、広島高師で一時期同僚だった木村素衛の著作は見当たらない。蔵書のなかで圧倒的に多いのは日本および東洋の古典に関連する文献であって、筆者のような戦後教育のなかで育った者にとっては、それだけでも西の教養には近寄り難いものがあることを思い知らされる。

もちろん本書の眼目は、「第一部理論編」にあり、そこでは二つの視点が交錯しているようにみえる。ひとつは、サブタイトルにみられるように、広島という地点から「平和・和解」という課題を、西のナシヨナリズム論に依拠して考察するというアクチュアルな問題設定であり、いまひとつは、著者が西の思想からもっとも核心的な概念枠組として抽出した「特殊即普遍のパラダイム」を、主体変容論の文脈で読み解く試みである。

本書の構成は後者の議論を踏まえて、前者の問題を考察するという順序になっているが、ここでは前者からみてみよう。西は戦前の国体論を主導したために、戦後は国家主義イデオ

主義者と国体論者を問わず、それは近代日本の思想界最大のテーマであったように思われる。筆者自身も、この問題にぶつかるときに学生時代の読書体験が思い出される。

「特殊やその運動を成立せしめるものとしての普遍は厳として設定されるが、その普遍と特殊個物との関係は、個物の中に普遍が分有された静止状態を語るのでも、個物と普遍の相互関係があるというたんなる事実のみを意味しているのではない。かれの場合、特殊個物に内蔵された普遍を、主体の自己運動によって「明」なるものへと展開する、という動的パラダイムとして主客の呼応が構想されている」（二二八頁）。

この引用から、「特殊即普遍のパラダイム」が実在論のレベルから主体変容論へと展開されることは容易に推察できるだろう。筆者には、主体変容のプロセスを論じる箇所に、西の思想に対峙する著者のオリジナリティがもっとも発揮されているように思われた。それは、平面的な「発展」図式に還元できない意識の活動なのである。

本書が、新しい世代によって、西晋一郎の全体像が描き出されるきっかけになることを願っている。

（元中央大学）